

生駒市文化財調査報告書第8集

生駒山北方窯跡発掘調査概報

1988年

生駒市教育委員会

生駒市文化財調査報告書第8集

生駒山北方窯跡発掘調査概報

1988年

生駒市教育委員会

例　　言

1. 本書は、生駒市教育委員会が、俵口町2115-2で行った発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、昭和62年7月1日に着手し、9月30日まで行った。
3. 発掘調査は、生駒市郷土資料館学芸員・明珍健二が担当した。
4. 調査にあたり、花園大学教授 伊達宗泰氏、大谷女子大学助教授 中村浩氏、奈良国立文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所の指導を受けた。
5. 調査記録、出土遺物等は、生駒市教育委員会において保管している。

目　　次

例　　言

目　　次

| | | |
|---|--------------|----|
| 1 | はじめに | 1 |
| 2 | 位置と環境 | 1 |
| 3 | 調査の経過 | 1 |
| 4 | 調査の概要 | 5 |
| | (1) 遺構 | 5 |
| | (2) 遺物 | 9 |
| 5 | まとめ | 11 |

挿図目次

| | |
|---------------------------|----|
| 第1図 窯跡分布図 | 2 |
| 第2図 調査地位置図 | 3 |
| 第3図 着手前地形図 | 4 |
| 第4図 着手前地形図及び遺構平面図 | 6 |
| 第5図 遺構平面図 | 7 |
| 第6図 半地下式小型平窯跡（SX01）平面・断面図 | 8 |
| 第7図 窯体内出土遺物（1） | 10 |
| 第8図 窯体内出土遺物（2） | 11 |
| 第9図 たき口出土遺物（1） | 12 |
| 第10図 たき口出土遺物（2） | 13 |
| 第11図 溝遺構（SD01）出土遺物 | 14 |
| 第12図 灰原出土遺物 | 15 |
| 第13図 灰原出土遺物 | 16 |
| 第14図 灰原出土遺物 | 17 |

図版目次

| | | |
|-----|-----------|------------|
| 図版1 | 1 着手前状況 | 2 半地下式小型平窯 |
| 図版2 | 1 灰原土層 | 2 焼成室内土層状況 |
| 図版3 | 1 焼成室上部床面 | 2 排煙装置 |
| 図版4 | 1 排煙穴検出状況 | 2 排煙穴 |
| 図版5 | 1 全掘状況 | 2 全掘状況 |
| 図版6 | 出土遺物 | |
| 図版7 | 出土遺物 | |
| 図版8 | 出土遺物 | |

1 はじめに

生駒市教育委員会では、須恵器の窯跡の構造等を把握する目的で、生駒市俵口町2115-2において発掘調査を実施することとなった。調査にあたっては、生駒市郷土資料館学芸員、明珍健二を担当者とし、事務を社会教育課、錦好見が担当した。

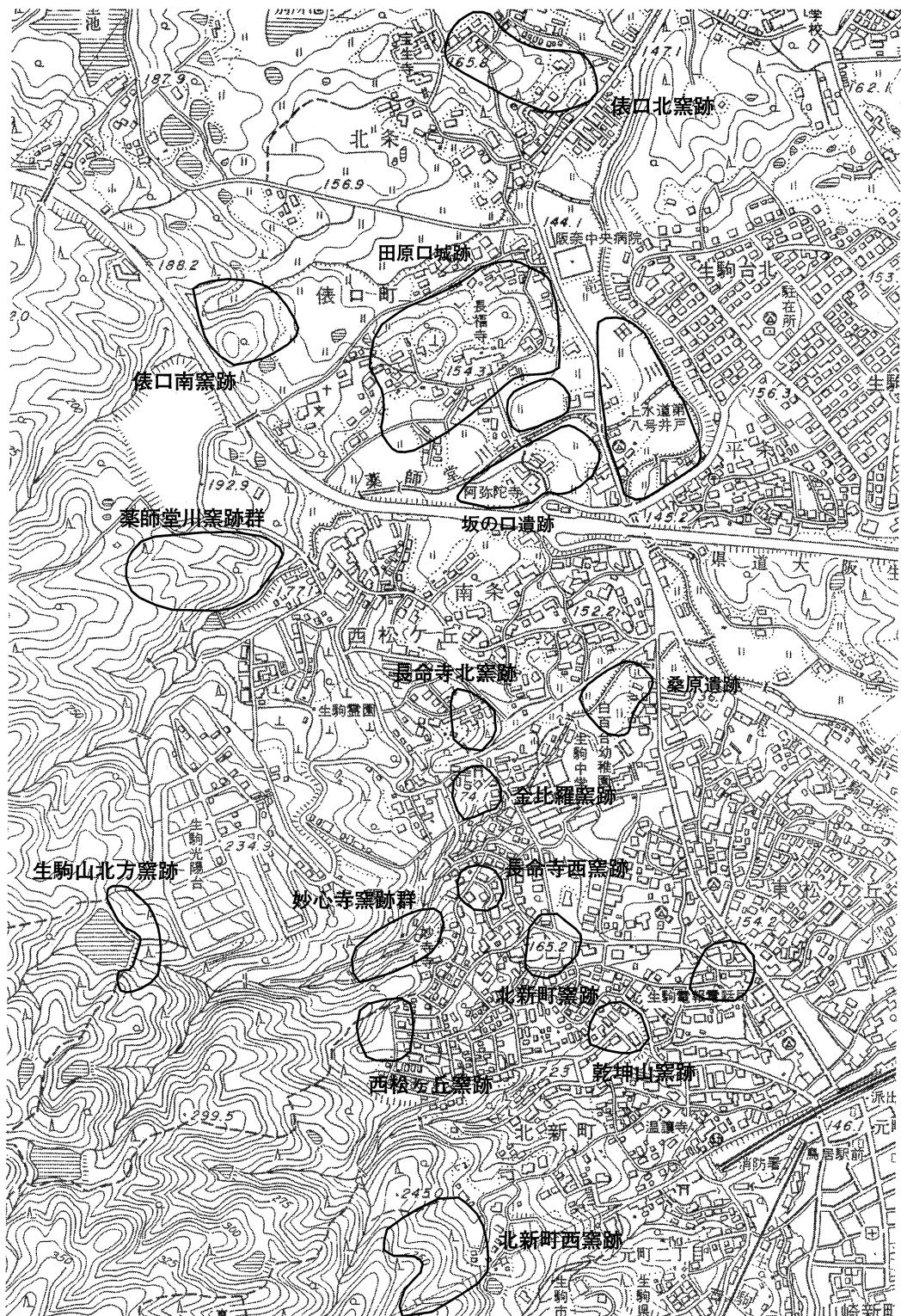
2 位置と環境

調査地は、生駒山の山腹の中腹に位置する。標高は、260m付近である。モチ川の上流部にある。ため池の下の東向き斜面に立地している。

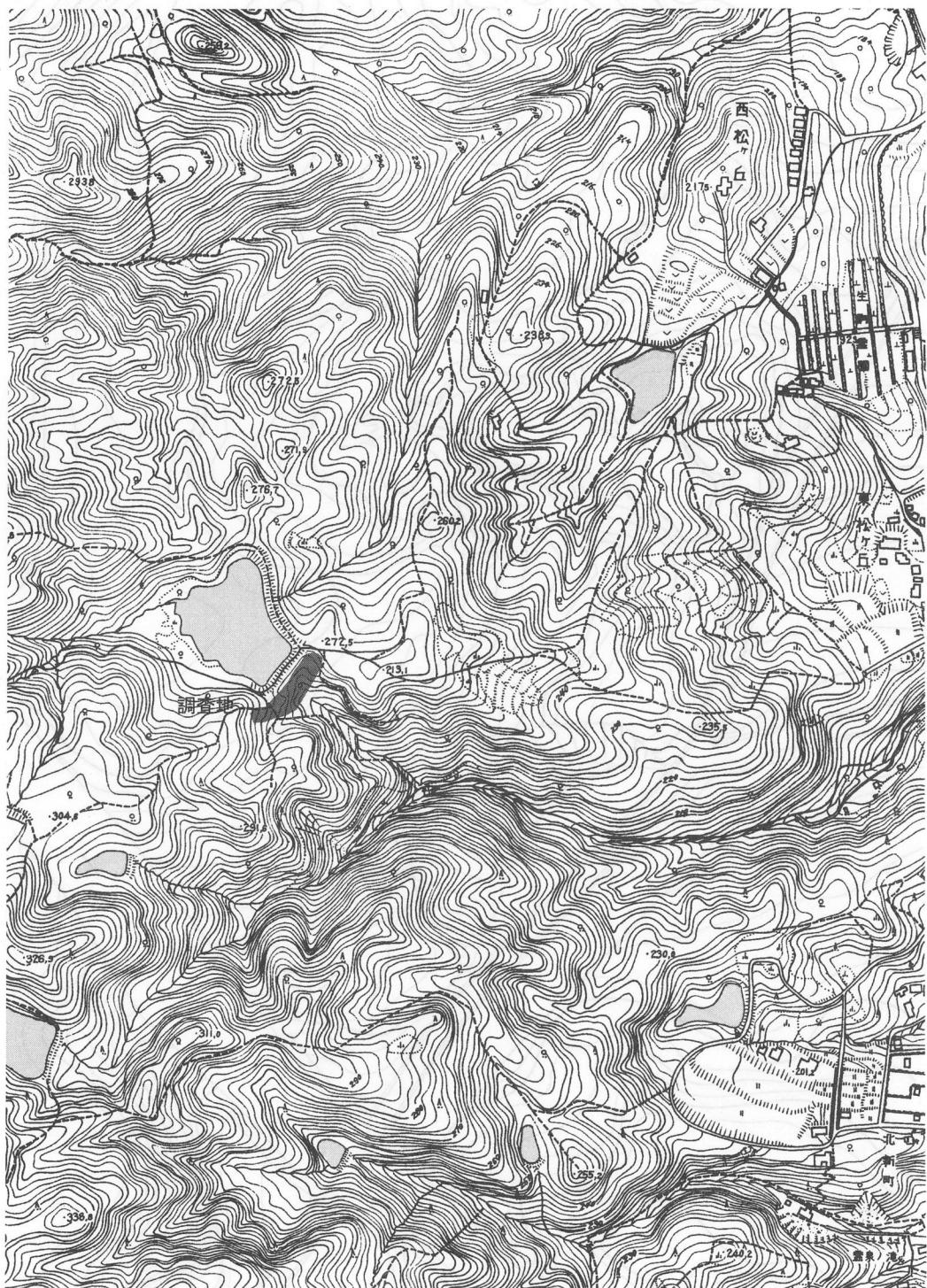
市内には、奈良時代後期の窯跡が分布することが確認されている。北田原町のイモ山窯跡群では6基の窯跡を検出している。高山町山田でも窯跡の所在が確認されている。俵口町では多くの窯が分布している。俵口北窯跡は、1984年に奈良県立橿原考古学研究所によって調査がなされ、灰原を検出している。生駒山北方窯跡はこれらの窯跡のなかでも標高の最も高い場所に立地している。

3 調査の経過

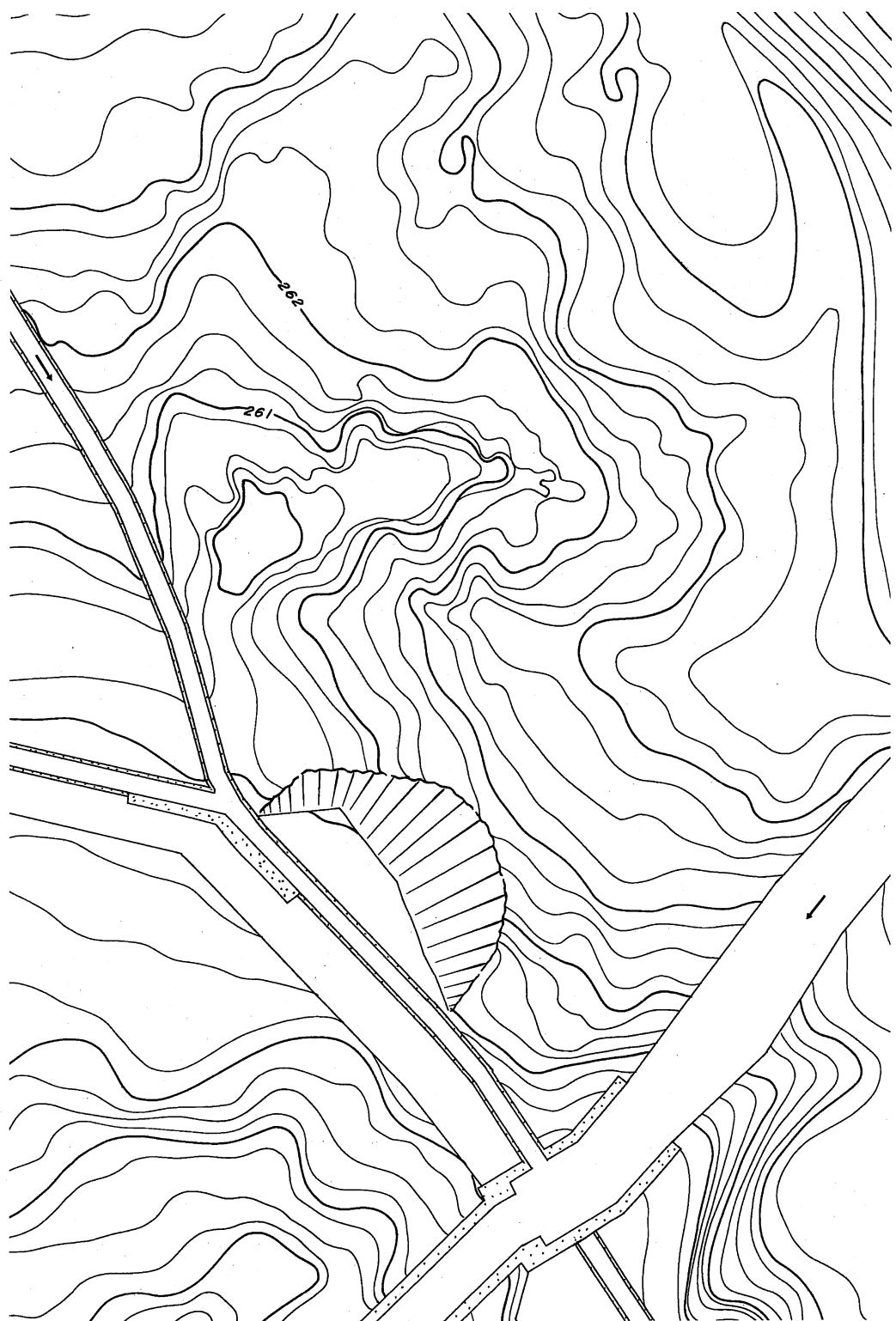
調査地付近においては、須恵器の散布がみられたため、付近に窯跡が存在するものとして、発掘調査を実施することとなった。現地調査は、昭和62年7月16日から実施した。当初、露出していた窪みを窯体とみて、調査を開始した。調査を進めるなかで、その東側から窯の灰原を見出し、平窯を検出した。2基の窯をあわせて調査を実施した。調査は、9月30日に終了し、調査面積は、約53m²となった。出土遺物は、コンテナ約250箱に達した。その後、整理作業に着手し、本書を刊行した。



第1図 窯跡分布図



第2図 調査地位置図



第3図 着手前地形図

4 調査の概要

(1) 遺構

半地下式小型平窯跡 (SX01)

全長約8.7mで、排煙孔、焼成部、燃焼部、排水溝よりなる。

焼成部は、花崗岩の地山を掘り込み、窯の壁面となしている。奥行きの長さは、2.2m、最大幅1.5m、奥壁部の幅は0.7m。内部の高さは、0.9~1.2m。

焼成部の最奥には、石と粘土で作られた煙突状の排煙装置が設けられている。上下2ヶ所に穴が設けられている。

排煙孔は、地山をくりぬき作られている。穴の長径は23cm、短径は18cm。穴の周辺は、2~5cm固化しており、さらにその周囲は赤色に酸化している。

燃焼部の北側において、石群を検出した。長径20cm程度までの自然石である。窯を閉塞する際に使用されたものであろうか。

燃焼部では、山裾側に向けてのびる、地山面を掘りくぼめた溝を検出した。幅0.5m前後で、長さ5.6mにわたって延びている。

灰原は、燃焼部の前面部から下部に向かって約3mにわたって検出した。幅は最も広いところで約3m、最大厚1.4mを測る。

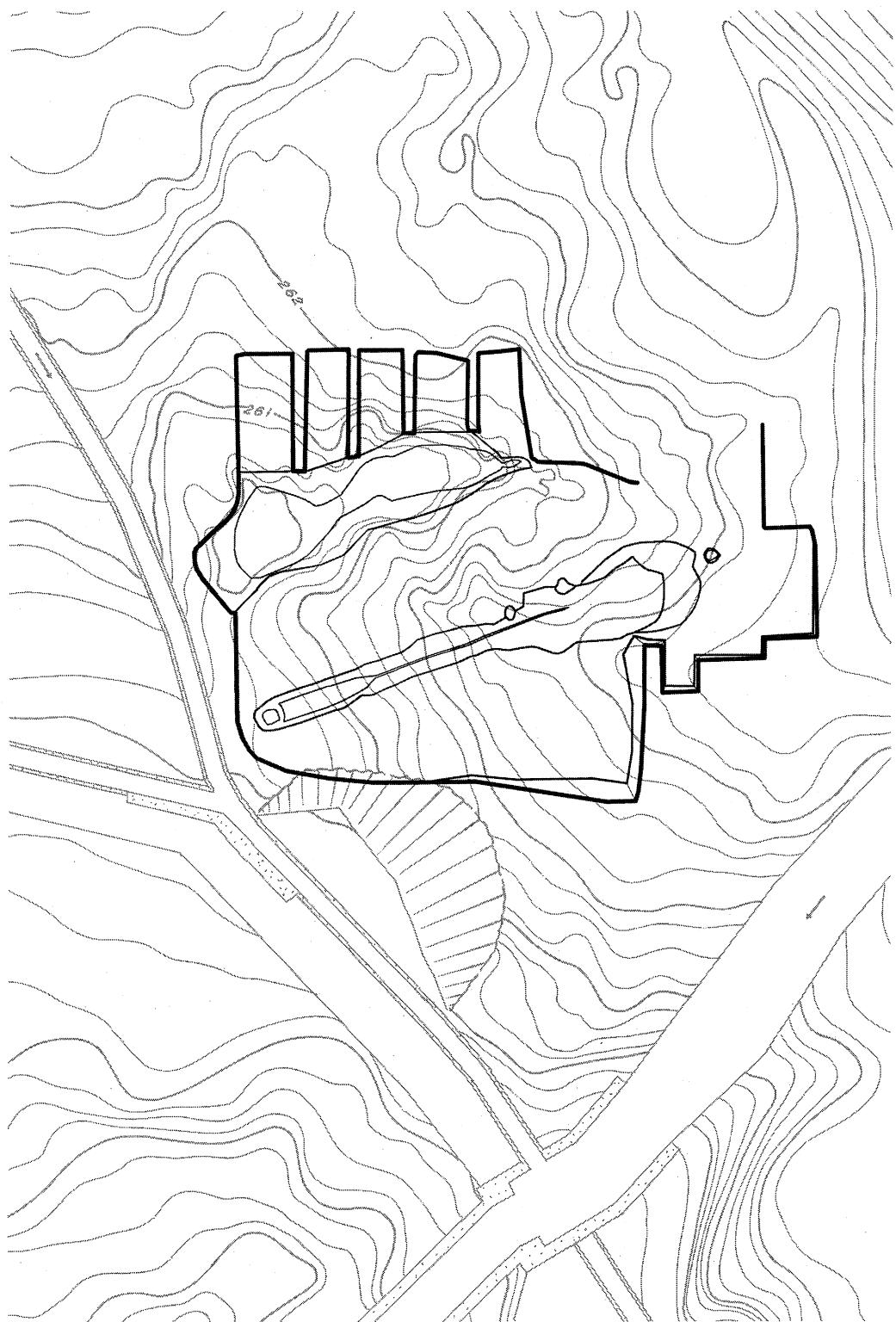
灰原を除去すると、燃焼部の前面部から地山を掘りくぼめた溝遺構を検出した。幅0.5~0.6m、長さ4.5mを測る。排水用に掘られたものであろう。

半地下式登窯跡 (SX02)

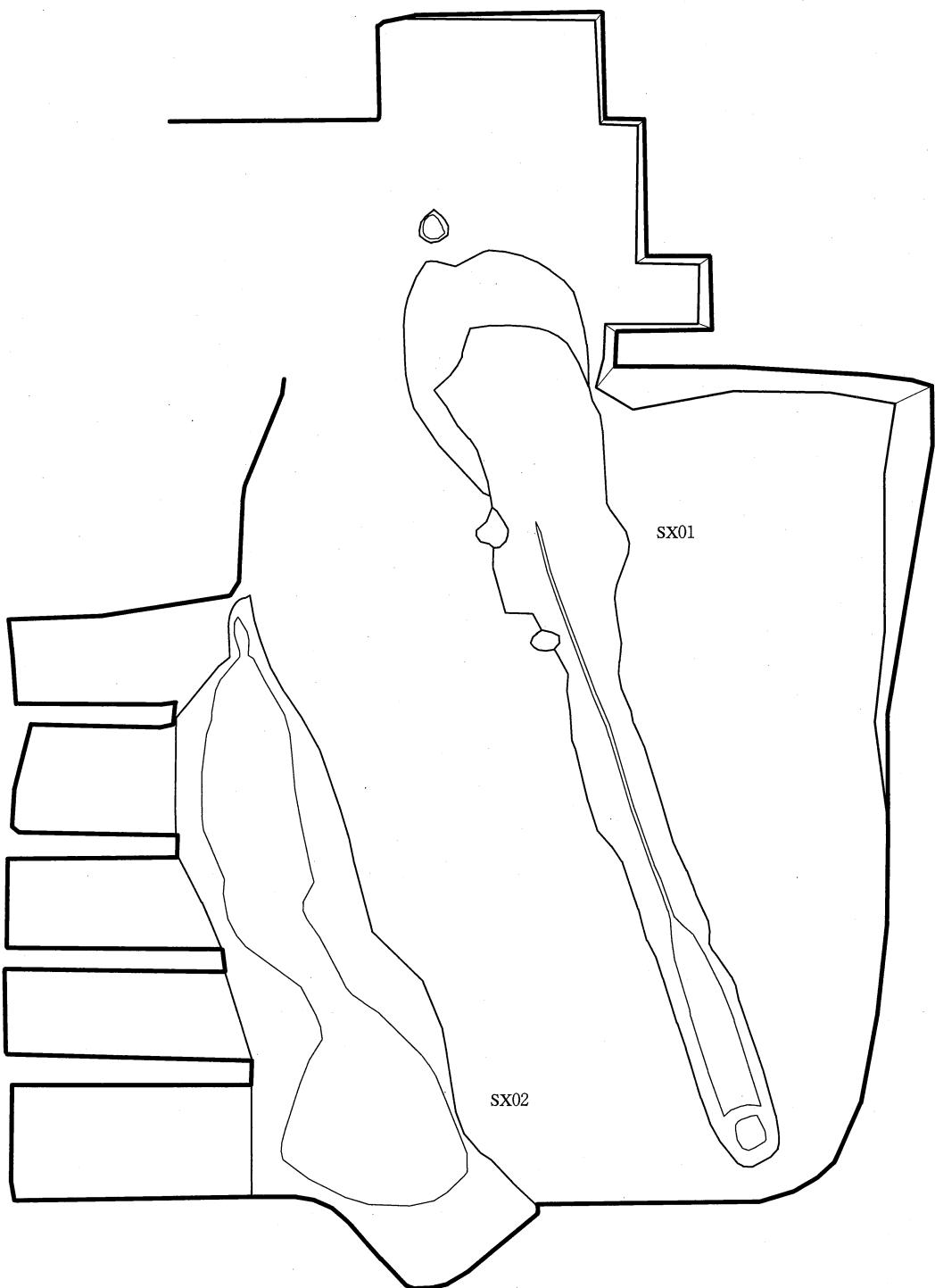
着手前には、細長い窪みが見られた。表土等を除去して検出した結果、窯遺構を検出した。全長5.9m、最大幅1.4m。残存状態はよくないと思われ、焼成部と燃焼部の境界は不明。窯の幅は、奥壁に向かって狭まる構造で、最奥に細長い溝状遺構が取り付く。この溝状遺構は煙道であろう。

形状不明窯跡 (SX03)

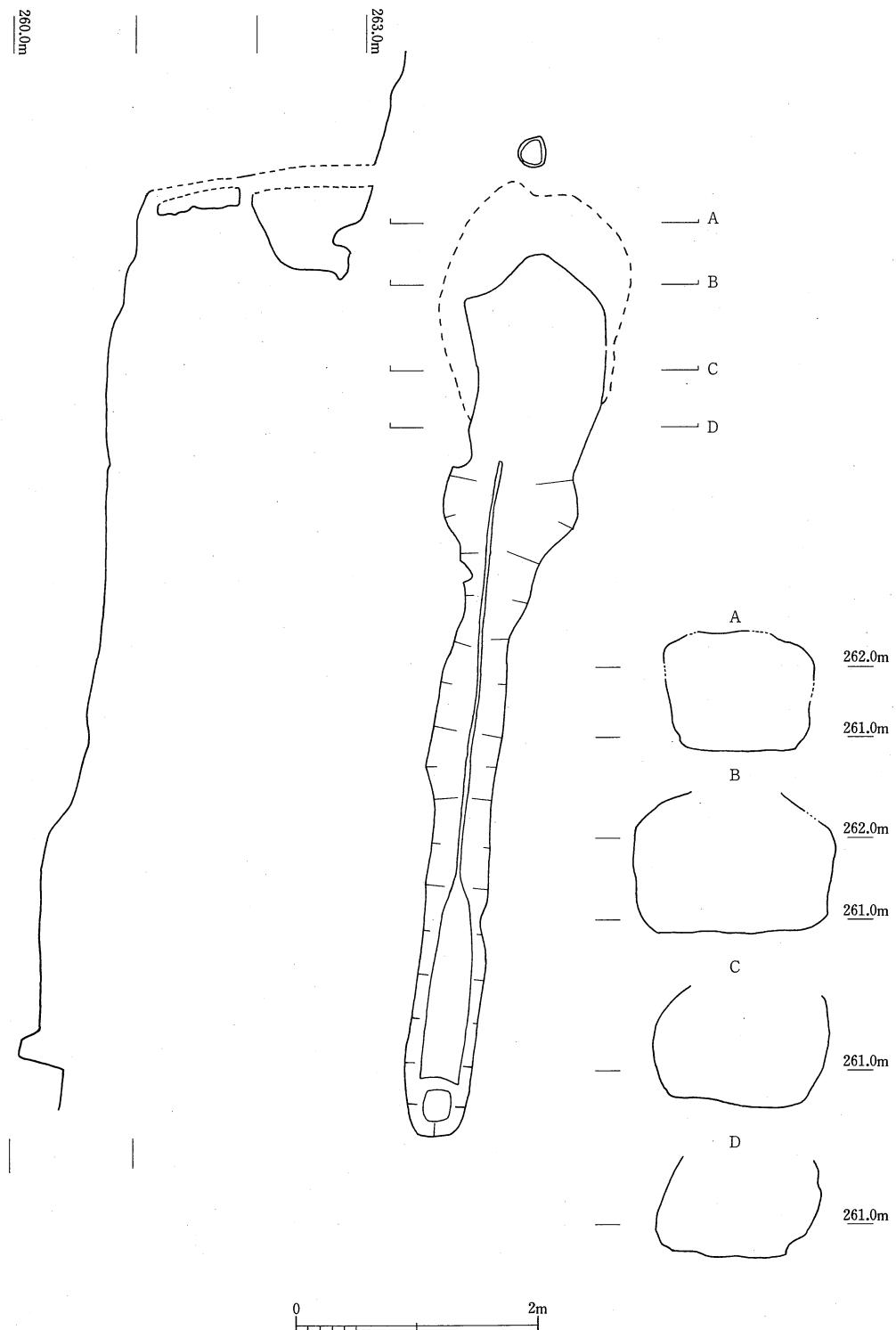
半地下式登窯跡 (SX02) の北側で、幅0.7~1.2m、深さ0.5~0.6mのU字型をした溝状の遺構を検出した。窯跡もしくは窯に附属する遺構である可能性が高い。



第4図 着手前地形図及び遺構平面図



第5図 遺構平面図



第6図 半地下式小型平窯跡（SX01）平面・断面図

(2) 遺物

出土した須恵器は、コンテナ約250箱に達した。須恵器の点数は、数万点にのぼるものとみられる。今回、登載した遺物はそのうちのわずかである。土器の器形がゆがんでいるもの、他の土器と溶着しているもの、窯壁が土器に溶着しているものなどが多数みられる。

時期としては、陶邑の4型式4段階から5型式1段階との間に比定されるものと思われる。器種としては、杯A、杯B、杯蓋、皿A、皿Bが多く出土した。出土割合としては、杯Bが圧倒的に多く、次いで杯蓋が多い。甕、壺なども若干見られる。その他にも、ミニチュア土器が出土した。

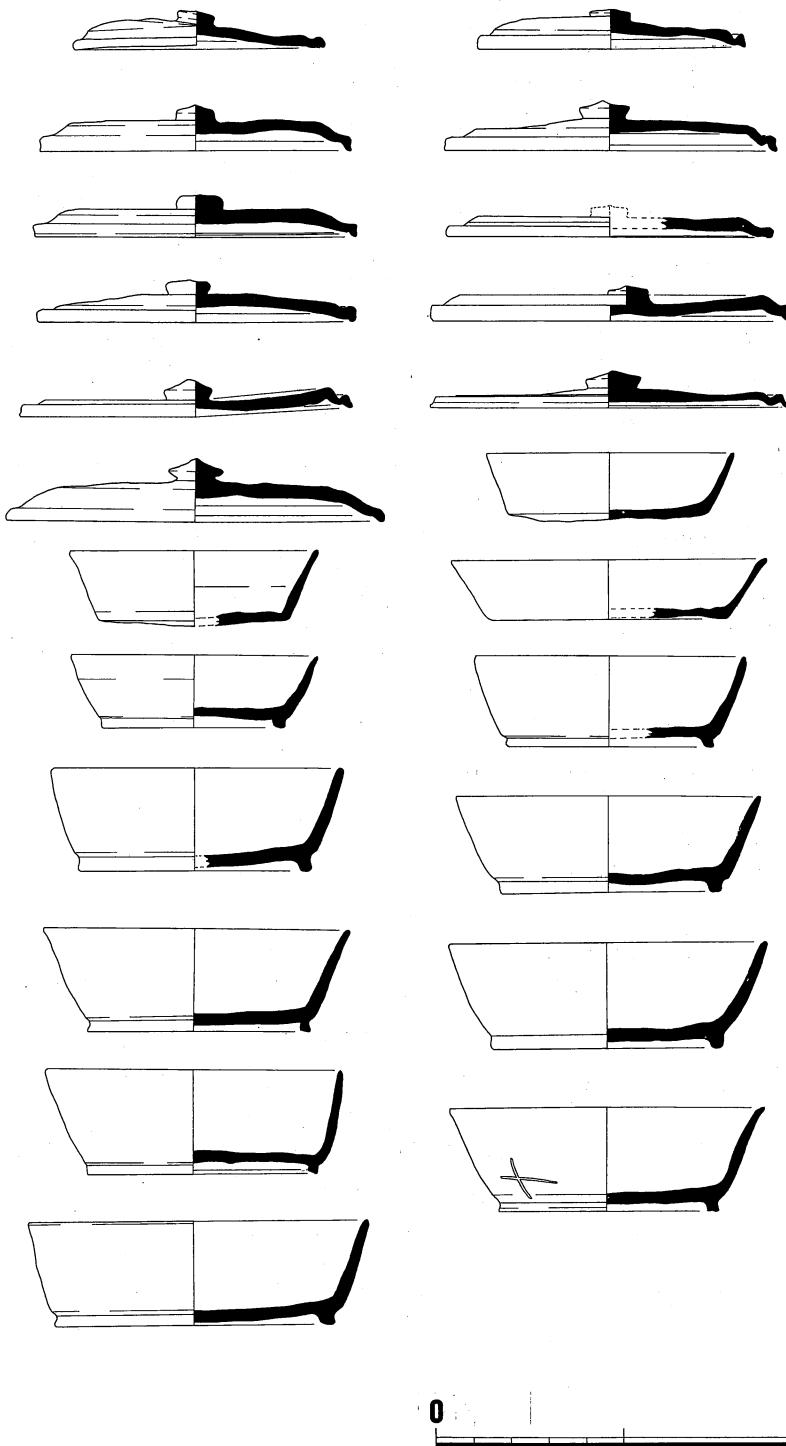
第7図と第8図は、半地下式小型平窯跡（SX01）の窯体内から出土した遺物である。第9図と第10図は、半地下式小型平窯跡（SX01）の焚き口から出土した遺物である。第11図は、半地下式小型平窯跡（SX01）の溝遺構（SD01）から出土した。第12図から第14図は、半地下式小型平窯跡（SX01）の灰原から出土した遺物である。

5 まとめ

小型平窯、半地下式登窯とそれに関連する遺構を検出した。これらの窯では、須恵器を生産していた。窯の操業時期は、8世紀の後半期にあたる。平城京で使用する須恵器を、この生駒山北方窯跡で生産していたと考えられる。生産地と消費地が結びつくということは貴重の発見である。

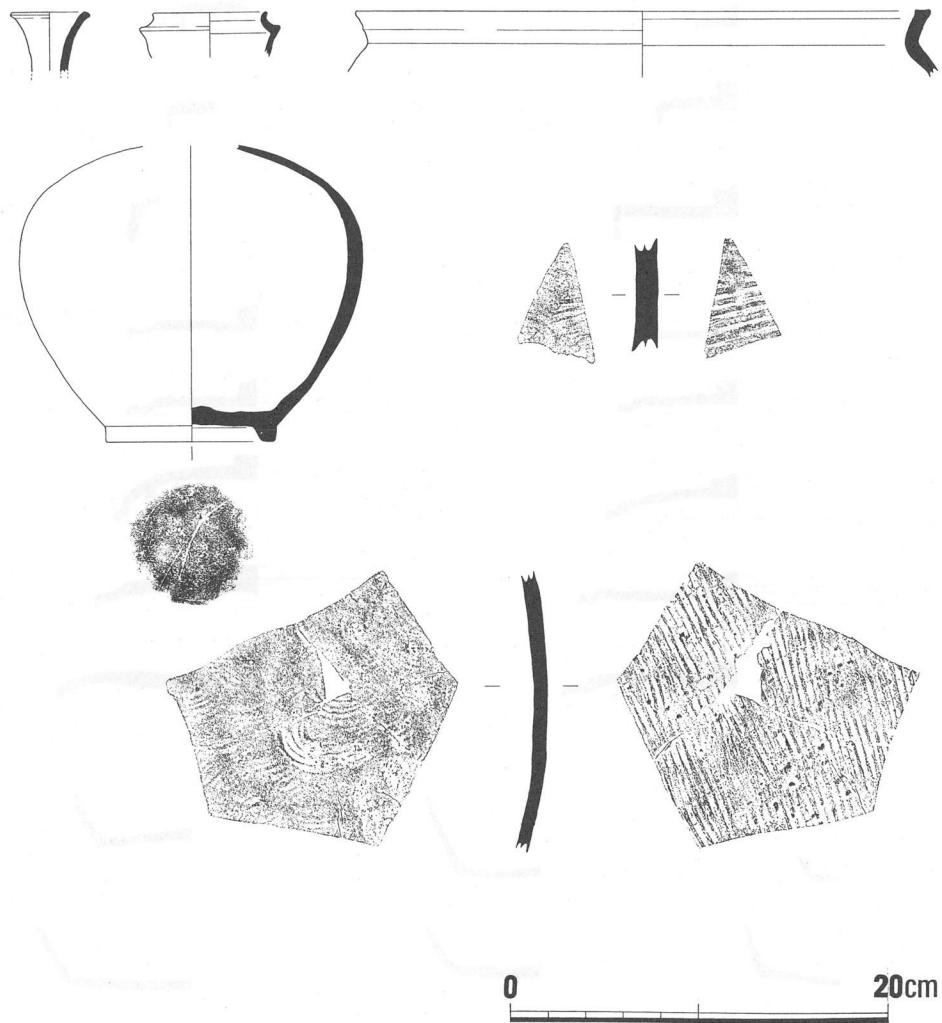
生駒には、生駒山北方窯跡のほかにも多数の窯が存在する。平城京へ須恵器を供給する一大古窯跡群として位置づけられよう。

今回の調査では、コンテナ250箱という大量の須恵器が出土している。遺物の詳細については、機会を改めて報告するものとしたい。

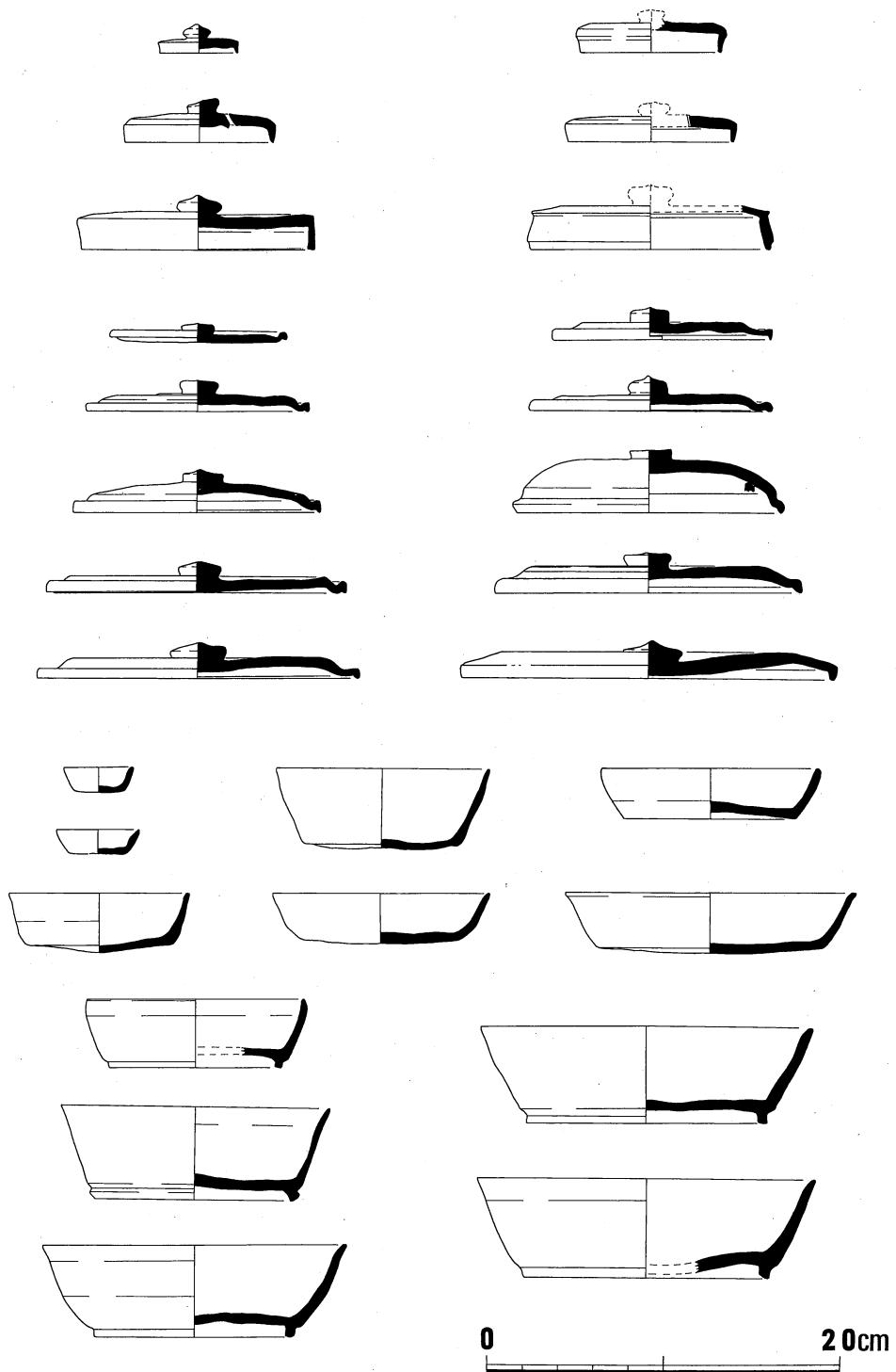


0 1 20cm

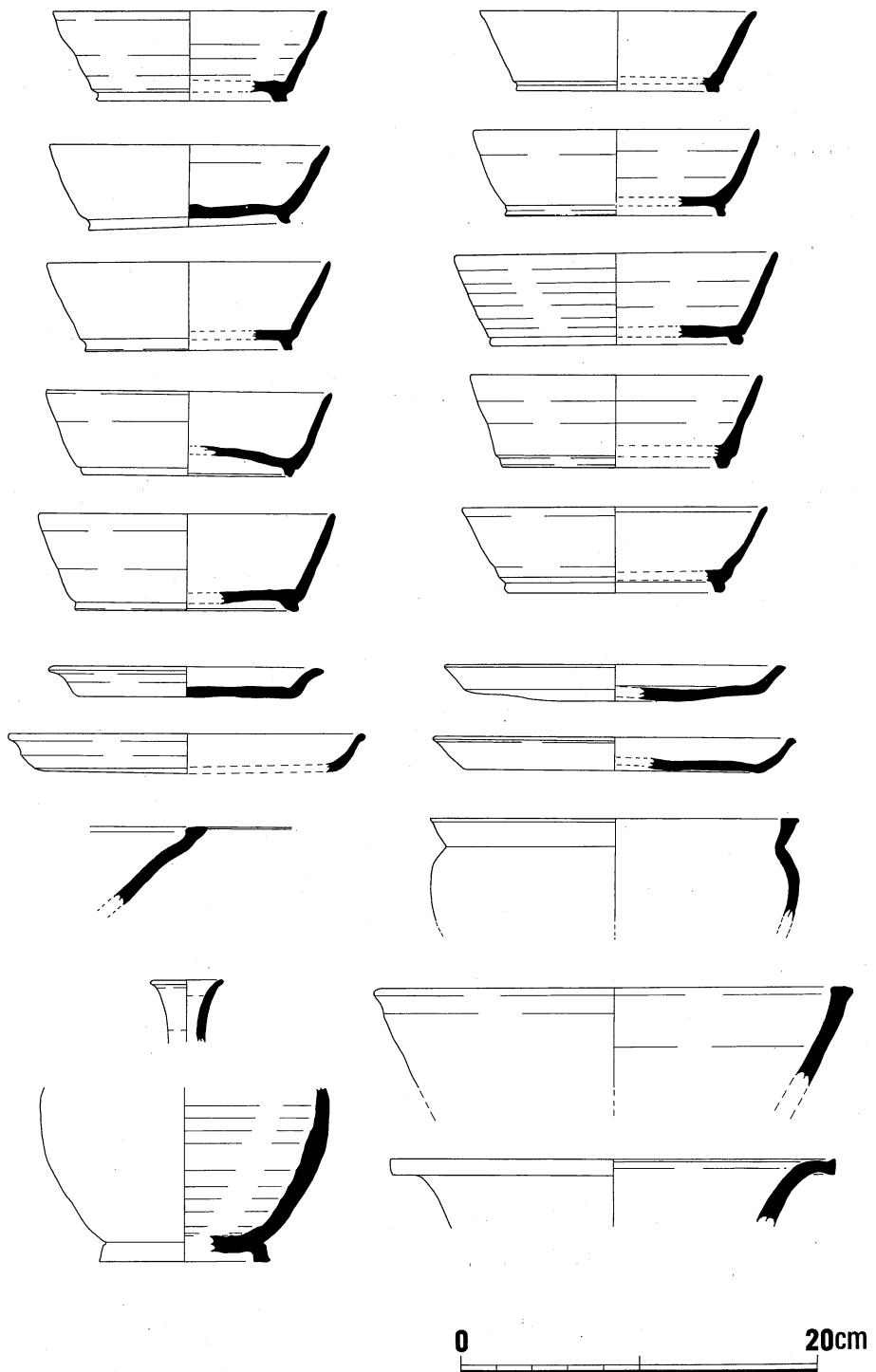
第7図 窯体内出土遺物（1）



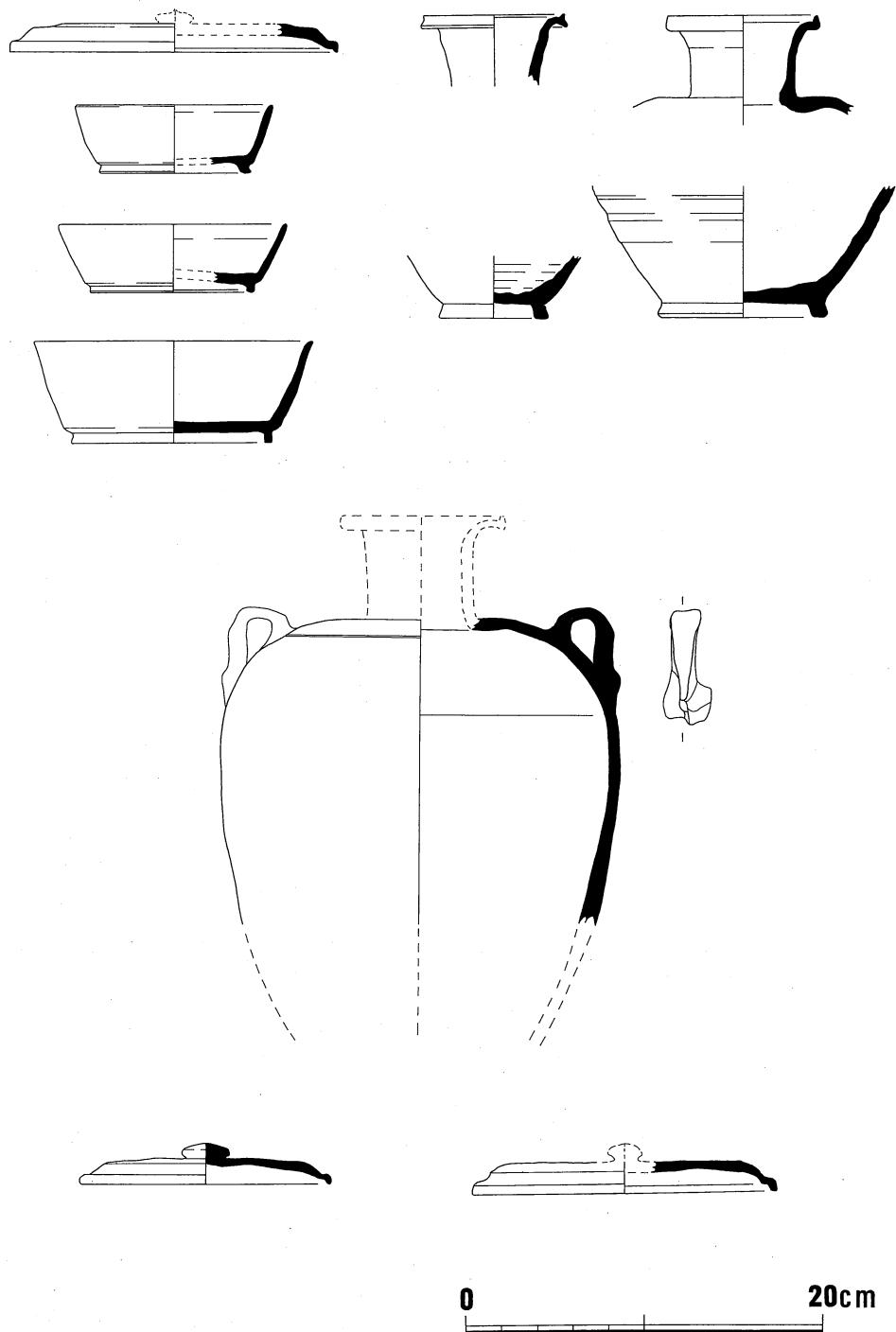
第8図 窯体内出土遺物（2）



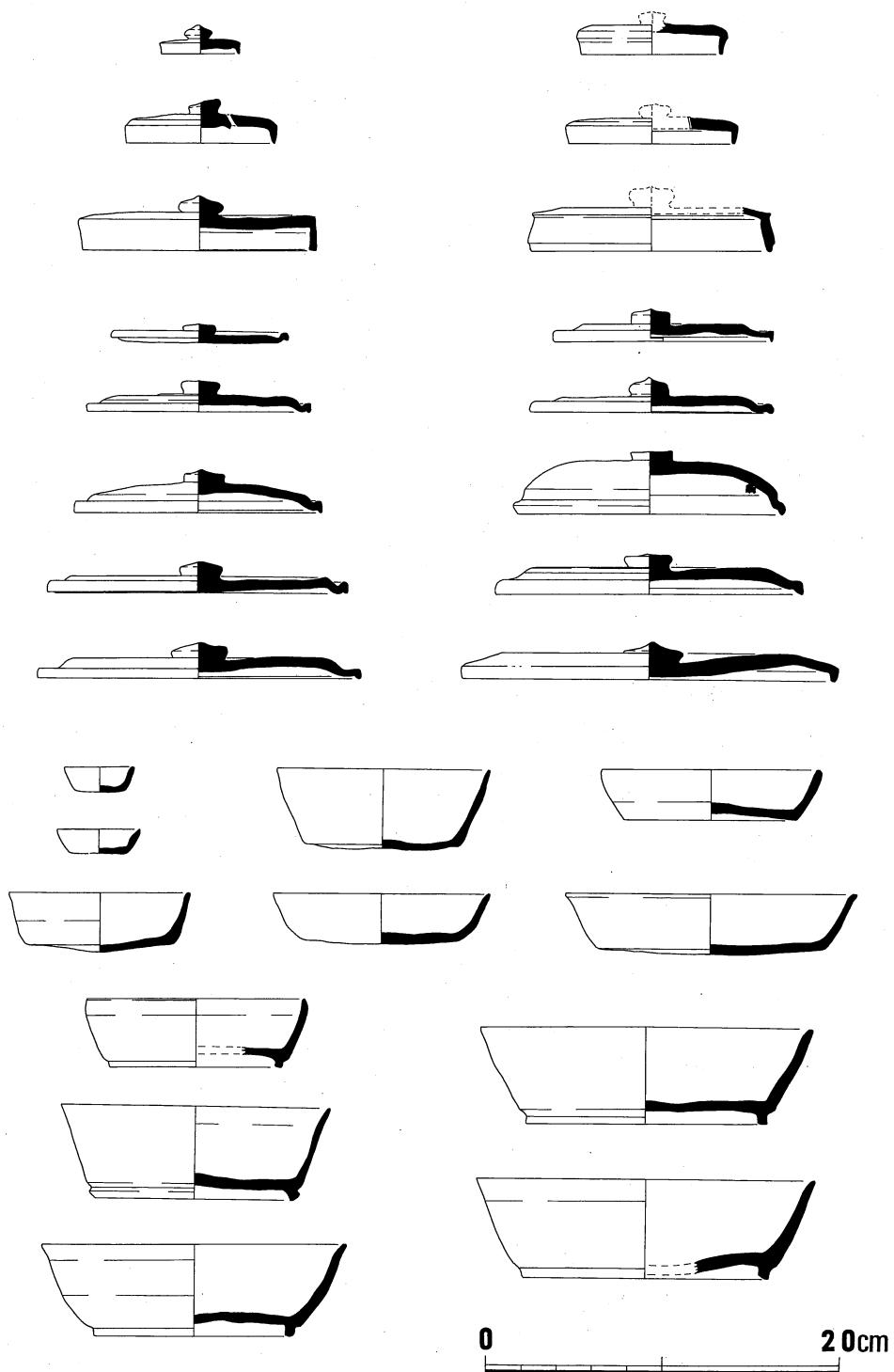
第9図　たき口出土遺物（1）



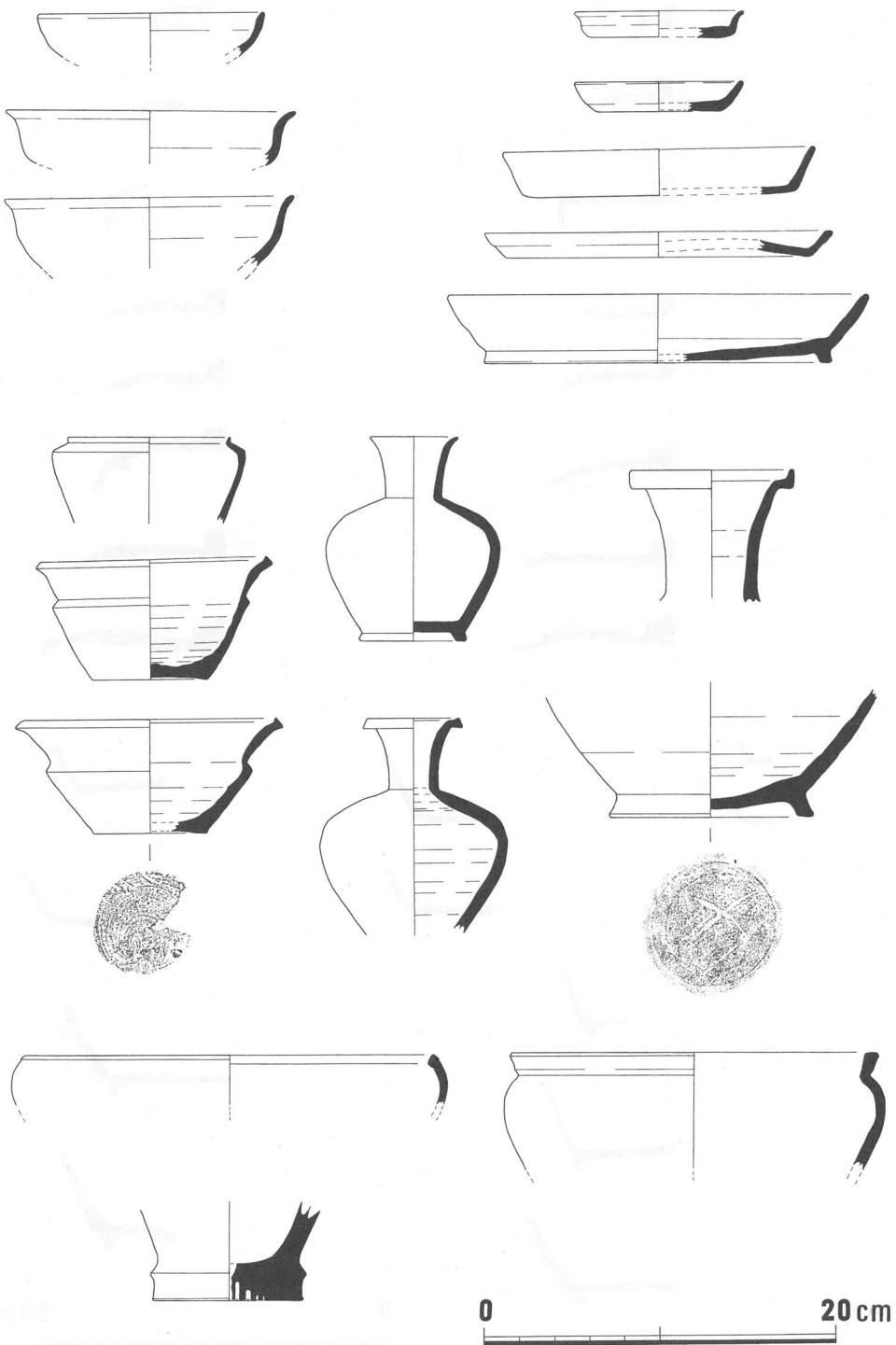
第10図　たき口出土遺物（2）



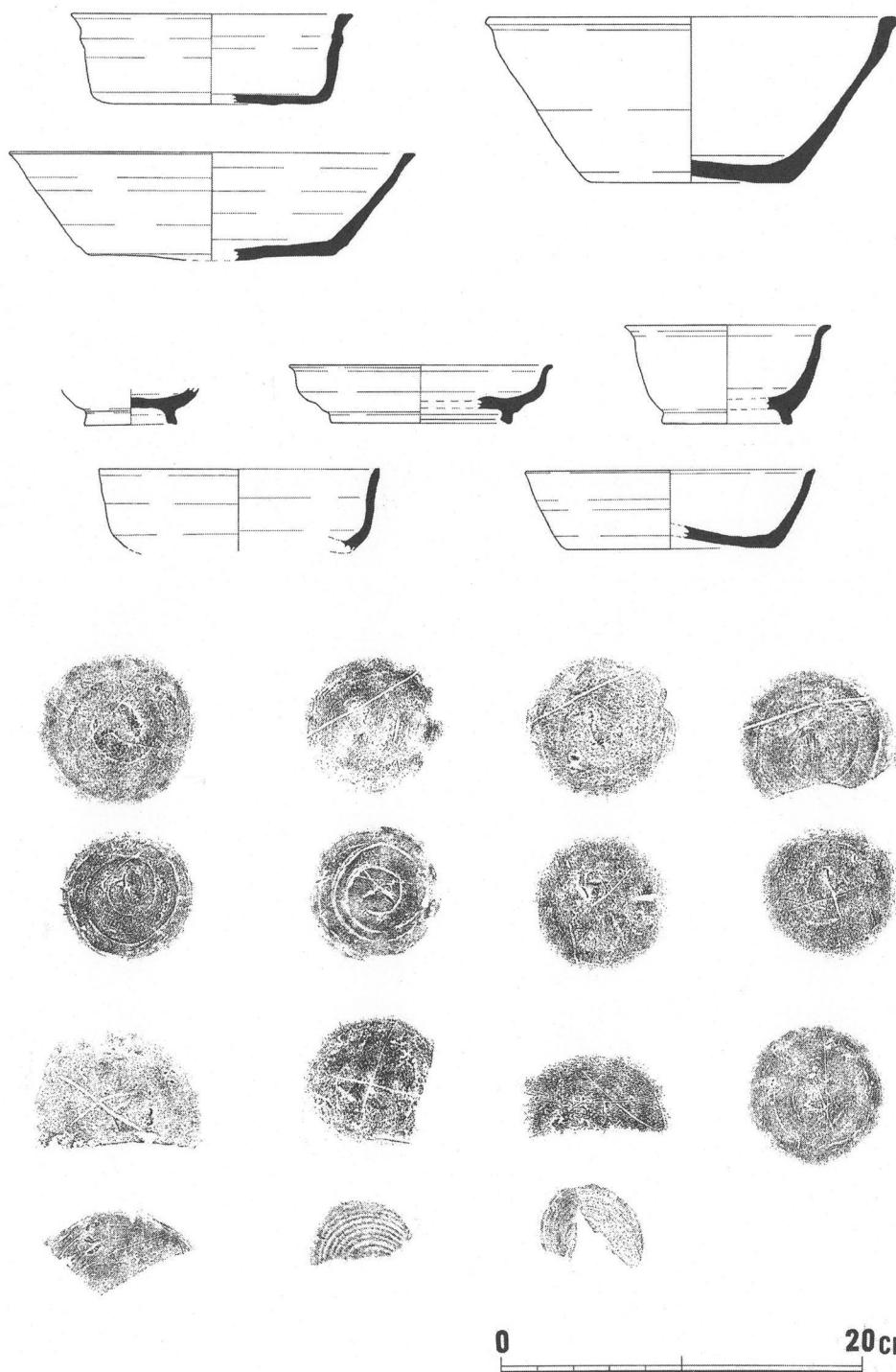
第11図 溝遺構（SD01）出土遺物



第12図 灰原出土遺物



第13図 灰原出土遺物



第14図 灰原出土遺物

図 版



1 着手前状況



2 半地下式小型平窯 (SX01)



1 灰原土層



2 燒成室内土層



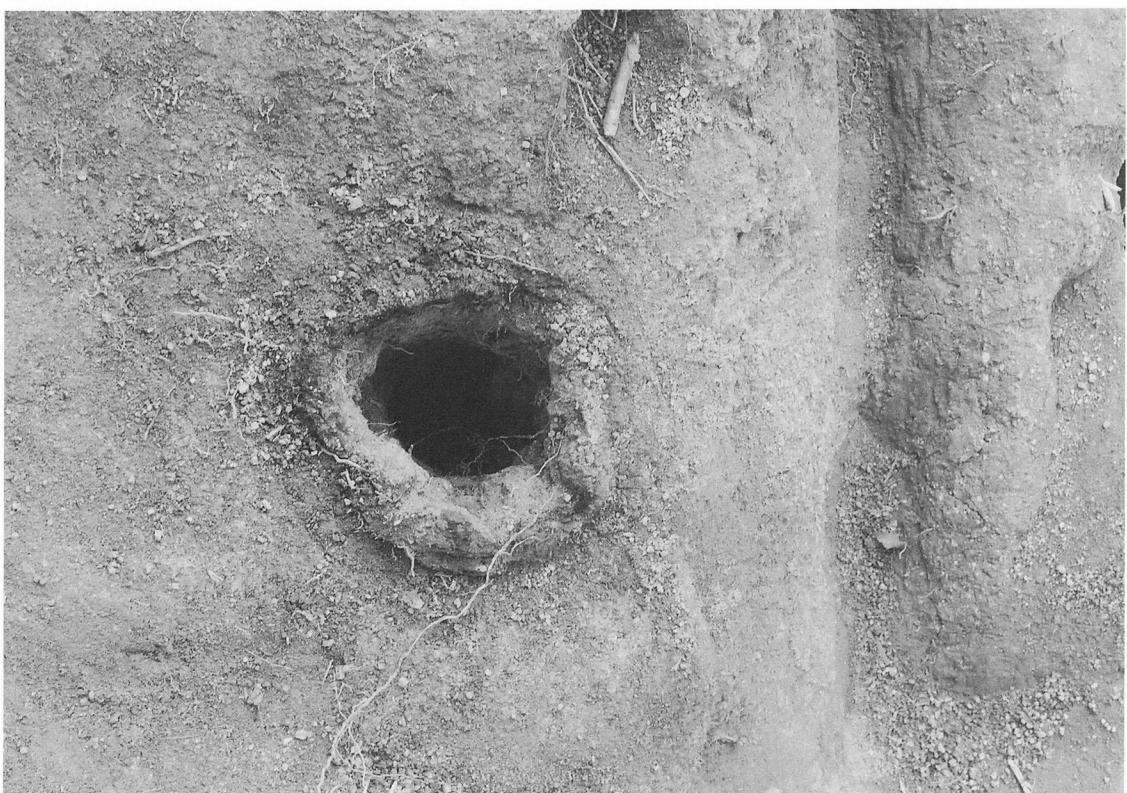
1 焼成室上部床面



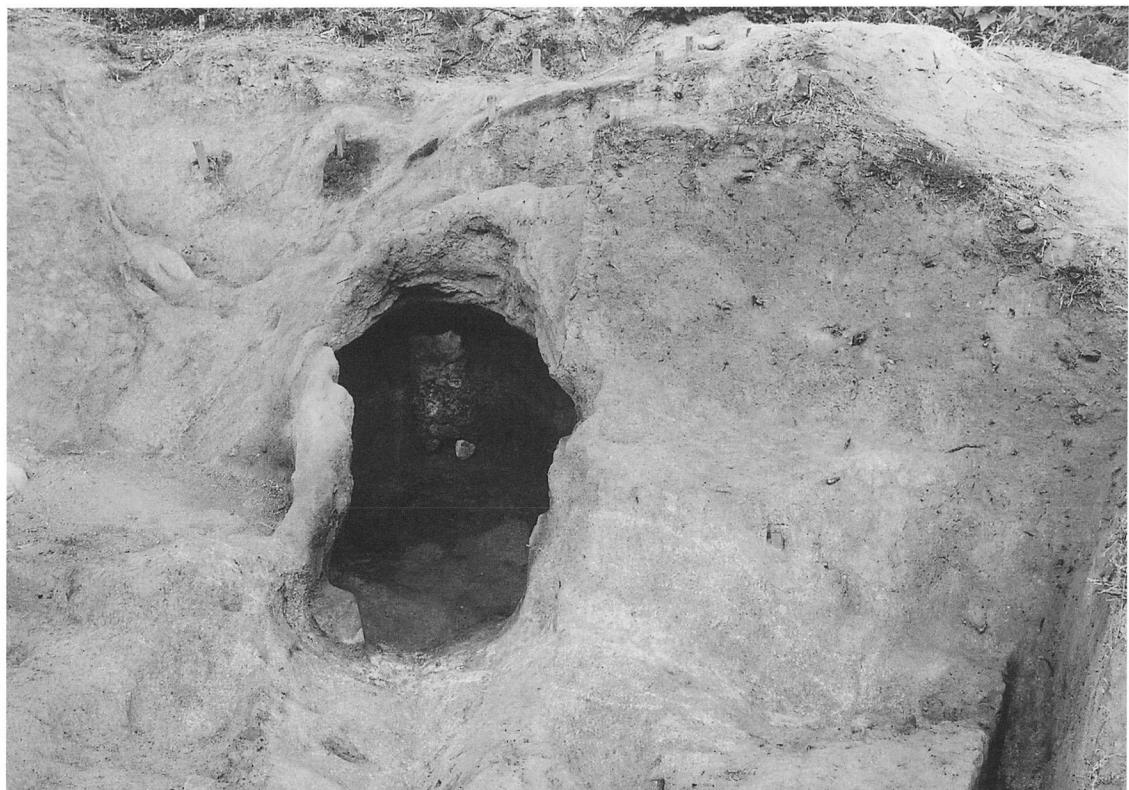
2 排煙装置



1 排煙穴検出状況



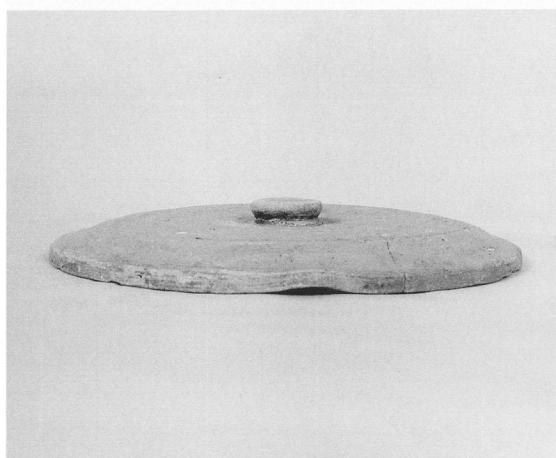
2 排煙穴



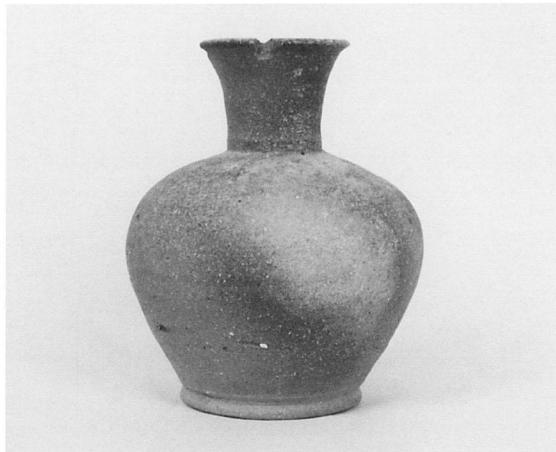
1 全掘状況



2 全掘状況







生駒市文化財調査報告書第8集
生駒山北方窯跡発掘調査概報

1988年3月31日

編集 生駒市教育委員会
発行 奈良県生駒市東新町8番38号